

十月興行

入新舞踊繪

見立



花

二の巻
下
豊竹古親大夫
相勤甲條

味搖の波

楽交

大和運動



人の和で築け明るい
大東亞

十月一日より七日まで

總親和週間

松竹株式會社
千日土地建物株式會社
新興演藝株式會社

乍憚口上

皇國日本の誇りはいまだ東亞全域に輝きわたつて國威の有難さを唯今皆様と共に仰ぐ次第に御座候然るところ古典藝術の本城たる當座の使命は益々重く茲に十月興行を迎へて一段の飛躍を試み當座櫓下豊竹古靱太夫は職域奉公の一念に燃え此度初役をもつて大曲を勤むることと相成り又鶴澤觀西翁は藝道精進の意氣物凄く高齡を以て五十一年振りに相勤め可申尙又永らく御引立を蒙り居候野澤吉左儀此度初代野澤松之輔と名乗り一層の奮勵を致すことと相成申候次第にて當興行に於ては更にお珍らしき狂言ばかりを選定して御期待に添ふことと相成申候間何卒いつくにも倍して御最眞御引立の程を偏に奉御願申上候

昭和十七年十月一日

四ツ橋畔

文 樂 座 敬白

昭和十七年十月一日初日

初日 午後 三時 開演
毎日午後三時半開演

・御 觀 覽 料。

一等席 御一名 金三圓五十錢

(一階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓五十錢

三等席 御一名 金六 十 錢

(各等入場税別)

〔一等御座席〕は五日前より
〔二等椅子席〕

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南⑦四七壹壹番
專用電話

一般御用 南⑦三〇三二番
の電話 南⑦三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますから御便利で御座ります。

すまひ願へ部傳宣座樂文は向の望希載掲御告廣トツカへ誌本

行 興 · 月 十

人 形 淨 瑠 璃

演出總形人・線味三・夫太

日 初 日 一 月 十

演 開 時 三 後 午 日 初

演 開 半 時 三 後 午 日 每

第一 お七 伊達娘戀緋鹿子

八百屋内の段より
火見櫓の段まで

第二 新 作 出 陣

西亭作詞作曲 謀茂都陸平振付
食満南北衣裳考案

幕

第三 傾城阿波の鳴戸

十郎兵衛住家の段

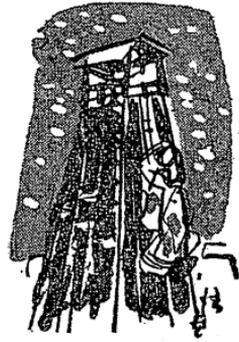
第四 本 朝 廿 四 孝

十種香の段より
狐火の段まで

第五 卅 三 間 堂 棟 由 來

平太郎住家の段より
木遣り音頭の段まで

八百屋内の段



人形役割

娘	お七	竹本重太夫
親	庄兵衛	竹本住太夫
吉	三郎	竹本七五三太夫
下女	お杉	竹本播路太夫
丁稚	彌作	竹本越名太夫
豊	澤	竹本呂賀太夫
豊	廣	竹本限若太夫
豊	助	竹本司太夫

伊達娘戀緋鹿子

八百屋内の段より
火見櫓の段まで

西鶴の「好色五人女」(貞享三年「二三四六」)にまで扱はれた戀故に放火の大罪を犯した八百屋お七の實話を劇化した紀海音作「八百屋お七戀緋櫻」(享保十七年「二三九二」正月豊竹座上演)の増補作「潤色江戸紫」(延享元年四月「二四〇四」豊竹座上演)作者爲永太郎兵衛(千蝶)他)を更に翻案改作したのが、本曲「伊達娘戀緋鹿子」全八段で、作者は菅專助、松田和吉、若竹笛躬。安永二年四月(二四三三)北堀江座に上場、この作ではお七は吉三をして天國の寶劍を主君に届けさせ度い一念で火刑をも厭はずに夜半に火の見櫓の半鐘を打つて市中の門を開かせる——放火の代りに櫓の半鐘を打つ趣向に改めた。後には歌舞伎のお七人形振りともなつた色彩感の優れた一場です。

娘 お七 吉田文五郎

親 庄兵衛 桐竹政龜

吉 三郎 吉田、玉助

丁 稚彌作 吉田、玉德

下 女お杉 吉田榮三郎

火 見 櫓 の 段

竹本春太夫

鶴友三造

鶴友三郎

鶴友三郎

鶴友三郎

鶴友三郎

吉田文五郎

吉田玉德

吉田榮三郎

吉田多三郎

人形役割

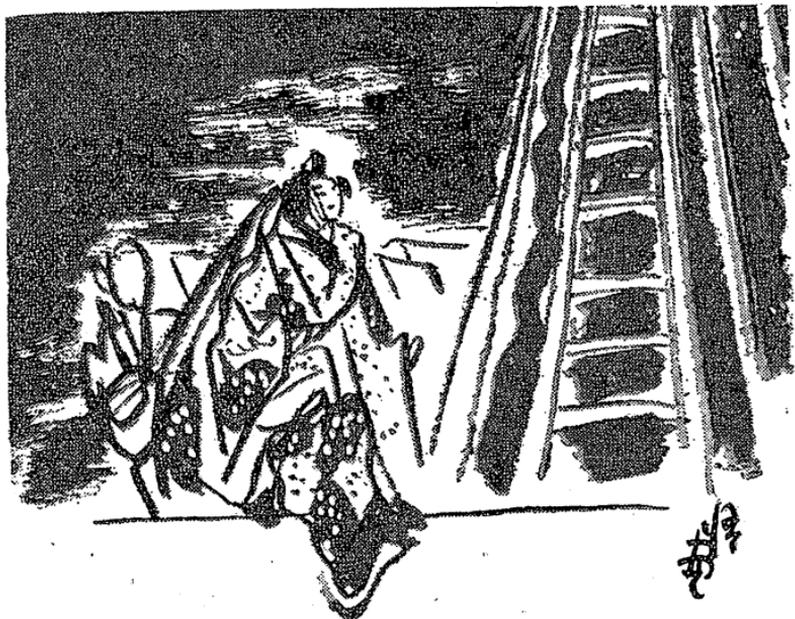
梗概

吉祥院の小姓吉三郎の故主左衛門之助は、殿から預つた天國の劔を期日中に探し出せない咎により切腹をしようとする。さうなれば吉三郎もその御供をして殉死しなければならぬ。で豫てから契りを結んでゐた八百屋お七の許を訪ね、それとなく別れを告げようとして忍んで行く。

八百屋では、お七に戀慕してゐる武兵衛から少からぬ借金をしてゐるので、お七に因果を含めて無理にも武兵衛と夫婦になつて呉れと親が涙で頼むのであつた。

縁の下でこの話を聞いてゐた吉三郎は、お七に宛てた書き置きを残して、何處ともなく去つて行つた。

それと知つてお七は、吉三郎の身を案じるのであつたが、兼ねて尋ぬる天國の刀を武兵衛が所持してゐる事を知り、丁稚彌作や下女お杉の助けを借りて奪ひとり、吉三郎の命を救ふ爲めにお杉を



お七

吉三郎の許へ届けにやらさうとする。然し夜中は町々の木戸が閉つて通行が自由でない。決心したお七は、罪を覺悟で、亂れ降る雪の火の見櫓に登り、半鐘を打ち鳴らし、火事と偽はつて木戸を開かせるのであつた。

床 本 抄

お七はとかくの返事さへ、泣沈みたる涙聲。事を分けてのお言葉を、更々無理とは思はねど、假の契りも二世までと、云ひ交はしたる戀仲を、捨て、男を持つならばいたづら者とも悪性とも、世に誦はれるは數ならず。愛しいお人は嘸や嘸、聞えぬ者じや不義者と、恨み受くるが私や悲しい。お前も義理がせつなくば、私が義理もちつと又、思ひ遣つて下さんせと、親に恨みも男故、詰らぬ理屈ぞ意地らしき。

ふつと氣の付く表の火の見、ヲ、然うじや、アノ火の見の半鐘を打てば、出火と心得、町々の門を開くは定、思ひのままに劍を届け、夫の命助けいで置かうか。鐘を

打つたる此身の科、町々小路を引廻はされ、焼殺されても男故、少しも厭はぬ大事な、思ふ男に別れては、所詮生きては居ぬ體、炭にもなれ灰ともなれと、女心の一筋に帯引締めて裾引上げ、表に駈け出で四辻に咎むる人も嵐に凍て、雪は凍りて踏滑る、梯子は即ち劍の山、登る心は三惡道の通ひ道。



二代目 鶴澤觀西翁略歴

本名梅本和三郎。元治元年十月二日（當年七十九才）大阪上福島に生る。十一才の時五代目鶴澤寛治の門に入り、小寛と名乗り文樂座に入る。十八才の時、鶴澤文吾と稱して地方巡業に出で、寛治歿後、六代目野澤吉彌の預り弟子となり野澤和三郎と稱す、この時廿才。吉彌逝去の後は五代目野澤吉兵衛に師事し、竹本谷太夫（後の染太夫）を弾く。廿六才の時、二代目竹本相生太夫の招聘により上京し、野澤八兵衛と名乗り、後、相生太夫と共に下阪して文樂座に戻つてゐたが、その後再度上京し鶴澤大造と稱し四五年にして斯界を去り實業界に入る。傍ら梅本香伯の素義名を以て三絃に親しむ。

大正八年、竹本若太夫の名の下に京都竹豊座に出勤したが後再び東京に戻り、寛治師五十年忌を機に七十五才にして二代目鶴澤觀西翁を襲名する。（初代寛治師隱居觀西翁と稱せしによる）斯くして今日に及び、今回五十二年振りにて文樂座に出勤することになつた次第である（現在の櫓下豊竹古靱太夫が十三才の時、大阪北新地裏町寄席の舞臺で廿七才の觀西翁が弾いたと云ふ）

西亭作詞作曲 棋茂都陸平振付

陣出 新 作

幕

豊	豊	豊	豊	豊	豊	豊	豊	豊	豊
澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤
鎮	仙	系	系	系	系	系	系	系	系
八	系	系	系	系	系	系	系	系	系

人秋後劉

名乃台 志田 系 云

本多孫仲 志田 秀次郎

法 前 相首 後 本多

若菜 志田 美云

(床本) 出陣

今ぞ秋得し出陣の、今ぞ秋得し出陣の、壽永の秋の嬉しきよ。されば保元も夢の跡、雨露に幾年木曾木立、今日ぞ錦の晴衣、これは清和源氏の嫡流、木曾冠者義仲にて候、さても平家の一族、月に浮かれ花に戯れ、奢侈専横に四海亂れ、我意暴戻に宸襟を御惱し奉る事、沙汰の限りにあるべき所長くも今度、逆徒追討の令旨を賜りて候、さらば疾く出陣致して、叡慮を安んじ奉らばやと存じ候。

如何に義仲が郎黨やある、まかり御前に候。一議もあるべき候程に、巴にこれへと申し候へ。仰せかしこまつて候。如何に巴殿御大將の御召し候、とく是へ御参り候へ。木曾山おろし烈しくて、木曾山風烈しくて秋の野分の身にしむも、君が恵みの温かき猛き、勇婦も情けにはなびく心の糸すゝき、招く尾花に誘はれて、御前に木曾の女郎花。御召しによりて侍り候。これは巴候か、今こゝに申するこそ候、我れこの度令旨を賜り候上は、急ぎ出陣あるべく候、生死不明は戦場の常、さる間おことには、幼時の一子義高を育て、後日の備へ怠りなく、留守

居厳しく相守り候べし。仰せかしこみ候へども、そは情けなき御事にて候、義高君の御身、妹山吹に頼み置き候上は、夢氣づかひ候はず、この度の御義、一期の大事、なか／＼の御事ならず、一手一指もあだならざるの御時也。たとへ女の身なるとも、軍に立つは君への忠、武門の譽れ、國を鎮めの御戦に男女の候べき、それ日の本の女性として、申すも長き御極み、その往昔の神后の後、妙なる御身に御劍を佩き、異夷鎮めの御舟出尊き英姿に敵もなし、誰れかおそれかしこまん、ましてや賤の、み民草心一すじ苧環のつながる糸のおみなえし、身は君恩に捨小舟、命は義による理りぞ、我が日の本の教へなれ是非に馬側の御供に、侍らせ給ひ候へかし。實に理りの事にて候、さらば山吹御前に後事を託し、出陣の供さし許すべし。こは有難き御言葉、過分の譽れ、この上や候べき。さらば先づ門出に八百武神に祈誓をなし、逆徒鎮護の御拜せん。實に／＼それよ傳え聞く、人皇五十有一代時の帝の宣旨を受け、かの古への田村麿、東夷鈴鹿の悪靈悪鬼、討鎮めんと御門出に、観音薩埵を祈らせて、普天の下卒土の中、いづく皇土にあらざるや、皇威に背

く逆徒ばら、鎮め給へと祈願ある。軍を進めて東國や、轉々伊勢路の悪鬼共、その時田村將軍は、其の時田村將軍は、無勢を以つて鬼神が中、無二無三に割つて入り、八面六びの勢に、悪鬼忽ち亡びけり。人間業にあらざりし、神の御業に外ならず、神の御業に外ならず。これぞ八洲の軍神、これぞ誠の神の國。御加護の程ぞかしこけれ、御加護の程ぞ奪けれ。いざ／＼故智に我れもまた、尊き令旨を畏みて、今出陣の門出に、祈り拜せん萬神、祈り拜せんよろづ神。

それ天地の開けしより、國常立の御尊立たせ給ひて天ツ神七代の後の大神は、申すもおそれ、天照す惠みも高き日の本の、國は千代までゆるぎなき、悪鬼惡靈、異夷原、鎮護退散、四海波靜かに神の御聲振る、實に神さぶる神樂舞、實に神さぶる神樂舞。

巴は仰せ巖りて、巴は仰せ巖りて、はや出陣の晴れ戦さ、去る程に、扱も其後義仲兵信濃を出でさせ給ひしは秋も仲空穗すまきの、なびく勢ひの二萬餘騎、義を泰山の兵等、轡並べて攻め上る、其の時平家の軍陣は、曾子

維盛惣大將、それに隨ふ十餘萬、たとへ幾百千萬とて、枯野の芒にことならず、何條恐れ申さんや、我れに正しき士道あり。義を一元の合戦に、神も力を添へぬべし、戦は我れに勝開の、えい／＼應の陣聲は、礪波の山にこたまして、木曾に名を得し四天王、一騎當千の勢は、秋のすまきを確ぐがごと、すさまじきともすさまじき、さて俱利伽羅の火牛の計、谷へおちこち敵の軍、哀れ木の葉の木曾嵐、我れも初陣と木曾駒の、栗毛のひづめ、かつ／＼、是は木曾にて女武者、巴が晴れの出陣なり君の御爲に散る命、何惜しからぬ紅葉ばの、手折れや討てや人々よ、聲によせ來る諸軍勢、もとより好む長刀を柄長にしかと追とりのべ、右よ左りよ前後、二つ巴や三つ巴、まんじ巴と戦ひける、一息ふつとつく鐘の、折りしも壽永秋の暮れ、桔梗かるかや女郎花、千草すだく虫の音の、りん／＼きり／＼、松虫きどす、聲は夜風に冥々たり、亡き兵を弔ひの我が武士道の情けには、敵も味方もおしなべて、松の恵みの下雫、松の恵みの下雫、皇が御徳のうるほふまで、いざ／＼征かん、いざ征かん、勝つて兜の緒をしめて、勝つて兜の緒をしめて。



十郎兵衛住家の段

竹鶴豊鶴 中
 本澤友長 尾太夫
 伊勢太夫 平
 豊竹古靱太夫
 鶴澤清 六

人形役割割

阿波の十郎兵衛 吉田榮三
 女房お弓 吉田文五郎
 娘おつる 桐竹紋司
 武太六 吉田兵次
 飛脚屋 吉田万次郎
 取巻 大ぜい

傾城阿波の鳴戸

十郎兵衛住家の段

大近松の「夕霧阿波の鳴戸」を翻案して近松半二、竹本三郎兵衛吉田兵藏等の合作になる本曲は全十冊よりなり、明和五年六月一日（二四二八）初日で竹本座に上場された。その第八冊目がこの十郎兵衛住家の段（順禮歌の段）で、今回櫓下豊竹古靱太夫が初役に勤める事になつたものである。

梗概

阿波の十郎兵衛は阿波侯に仕へてゐた武士であつたが、舊主櫻井主膳が主家より預つてゐた名劍國次の刀を何者にか盗まれたので、その詮議の爲めに浪人となり、大阪の町端れ玉造に身を隠し、銀十郎と名を替へて、今では盗賊の群に入つて刀の行方を探してゐた。
 或る日、武太六と云ふ悪者が訪ねて来て、十郎



阿世の鳴戸

十と兵衛の家
のぞん

此処櫓下

曲豆竹古鞆太夫

柳勤甲花

お甲子

おつ

たまま

菊

兵衛の引受けた金の催促をするので、女房お弓は行く。

色々と歎願したが承知しない。十郎兵衛も日暮れまでは今日の中と二人連れ立つて出掛けて行つた。引違ひに飛脚が来る。投げ込まれた一通には、同類に吟味かゝり中には捕へられたものもあり、寸時も早く立退けと仲間からの知せの状である。女房は驚き神佛に祈願するのだつた。

その時、順禮歌を唱うて来る聲が聞えた。で、お弓は施しをしようと門口に立出てみると、それは可憐な少女であつた。呼び入れてその子供の身の上を聞いてみると、何と自分等が國に残して来た娘おつるではないか。知らぬ娘は今日までの悲しい物語をするのだつた。お弓の心の中はかきむしられる様だつたが、今の身の上、我が子にまで罪を着せねばならぬ破目を恐れて、實情も明さず路金を與へて故郷へ歸る様にとすゝめた。子供は名残り惜しげに去つて行く。後姿を見送る母親――今はもう堪らなくなり、夢中にその後を追つて

その日の夕暮れ時だつた。十郎兵衛は前の順禮を伴つて歸へつて来た。然し家には妻も居ない様子。十郎兵衛は今乞食共にいちめられ金を奪はれようとしてゐたのを助けて来たのであつた。順禮は十郎兵衛の尋ねるまゝに正直に「金は小判を澤山に持つてゐる」と云ふ。慾しい金である。十郎兵衛はその金を暫らく借して呉れと頼むのであつた。順禮は恐れて大聲を上げた。近所へ聞えては大變と、順禮の口に手を當て、金を借して呉れと頼む十郎兵衛。フト氣が付いて手を離してみると無残にも順禮は息を失つてしまつてゐた。驚いて介抱したが、既に絶命してゐる。慌てゝ十郎兵衛はその死骸を布團の中に匿した。

所へ女房お弓が歸へつて来て、今日國元から順禮姿の娘おつるが不思議にこゝへ訪ねて来た事を物語つた。十郎兵衛は娘の着てゐた着物の柄をき

ゝ、さては今殺したのは娘だつた事を知り、總べてをお弓に話した。お弓は娘の死骸を抱きかゝへて號泣した。

折柄捕手が押し寄せて來た。二人は我が家に火を放ち、娘の死骸を手づから火葬に附して遁れて行く。

床 本 抄

誓は重き觀世音、普陀落や、岸打なみは三熊野の、那智のお山にひびく瀧津瀬、年はやう／＼とうどうの、道をかけたる笈摺に、同行二人とするせしは、一人は大慈のかげ頼む、ふるさとを、はるばるこゝに紀三井寺、順禮に御報謝と、いふも優しき國訛、テモしほらしい順禮衆、ドレ／＼報謝しんぜうと盆に白米の志し、アイ／＼有がたう御ざりますと、いふ物腰から棲はづれ、可愛らしい娘の子、定めて連衆は親御達、國はいづくと尋ねられ、アイ國は阿波の徳島でござります、ム、何じや徳島さつてもそれは、マアなつかしい、わしが生れも阿波の徳島、そして父様や母様と一所に順禮さんすのか、イエ

／＼、其父様や母様に逢ひたき故、それでわし一人西國するのでござりますと、聞いてどうやら氣にかゝる、お弓は猶も傍に寄り、ム、父様や母様に逢ひたきに西國するとはどうした譯ぢや、それが聞たい、マア其親達の名は何といふぞいの、アイ、どうした譯じや知らぬが、三つの年に父様も母様も、わしを婆様に預けてどこへやらいかしやんしたげな、それでわたしは婆様の世話になつてゐたけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい、顔が見たい、それで方々尋ねてあるくのでござります、父様の名は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申しますと、聞いて喫驚りお弓は取付き、コレ／＼アノ父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの年別れてばゝ様に育てられてゐたとは、疑ひもない我娘と、見れば見る程稚顔、見覚えのある額の黒子、ヤレ我子かなつかしやといはんとせしが。

云つゝ内へ針箱の、底をさがして、豆板のまめなを喜ぶ餞別と紙に包んで持つて出で、コレ、何ぼ一人旅でも、たんと錢さへやりや泊める、わづかなれども志し、此銀を路銀にして、早う國へ去にや、必ず／＼煩ふてばした

もんなと、銀を渡せば押戻し、嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物を、たんと持つております、そんなりやまうさんじます、忝うござりますと、泣々立つを引とどめ、それはそうでも是はわしが志と、無理に持たして塵

打拂ひ、これもう去にやるか、名残が惜い別れとむないこれ今一度顔をと引寄せて、見れば見る程胸せまり、離れがたなき憂思ひ、それと知らねど誠の血筋、名残惜げに振返り、どこをどうして尋ねたら、父様や母様に、あはれることぞ、逢はしてたべ南無大悲の観音様。父母の恵も深き粉川寺、佛の誓ひ頼もしきかな。泣々別れ行く跡を、見送り、延び上り、これ娘、ま一度こちら向いてたも、折角長の海山越え、艱難してあこがれ尋ねるとし子に、不思議と逢ひはあひながら、名乗らで退す母が氣は、どの様に有らうと思ふ、狂氣半分半分は死んでゐるはいの、まだ生長の有る子をば、親故路頭に立すかと、其儘そこにどうと伏し、消え入る許り歎きしが、起直つて涙を押へ、イヤ、どう思ひ諦めても、今別れては又逢ふことはならぬ身の上、譬へ難儀がかゝらばかゝれ、又其時は夫の思案、程は行くまい追付いて、つれて

戻らう、さうじゃと、子に迷ふ、道は親子のわかれ道跡をしたらうて。

久しぶりで母が添乳と笈摺外し帯解く解く、見れば手足も冷えわたり、息も通はぬ娘の死骸、ヤアコレ、コリヤ娘は死んでゐる。どうして死んだ、どうしてと、餘りの事に涙も出でず、立たり居たり夫の傍、あの娘は、ド、ド、ド、どうして死んだ。お前様子知つてじゃ有らうサアいふて聞かしてと、氣も取り上す有様を、見るに皮肉も離るゝせつなき、ホ、道理じゃ、尤もじゃ、様子いふたら因果づく、さつきに内へ戻る道、其娘が銀を持つて居るを、非人どもがよう知て取るの剝ぐのと聞いた故、可愛そうにと連れ戻り、様子を聞けば銀も有る故少々成共武太六に返す工面、二三日貸してくれと譯をいへども子供のこと、聲山立て泣きわめく、近所の聞えが氣の毒さに、つい口を押へたが急が詰つて、ソレ、其様に死んでしまつた。え、いぢらしいことしたと、餘所の様に思ふたが、それが娘で有つたとは、物の報ひか因果事、コリヤ、こらへてくれよ女房と、聞く程身も世も

あられぬ悲しき、そんなら、お前が殺さしやんしたか、ハア、ても扱も是非もなや情なやと、母は死骸を抱き上げ、コレ娘、是程むごい親々を、よう尋ねて来てたもつたの、一人旅で泊てはなく、野に寝たり、山に寝たり、こわい事や、悲しい事、父様や母様に、逢たさ故と云やつた時は、悲しうてく、身ふしも胸も碎くる様に有つたれど、そこをじつと辛抱して、親とも云はず退なしたのは、わがみが可愛さ許り、其時留て置いたらば、かういふことは有るまいに、退なした故の此間違ひ、それから起つたことなれば、殺さりやつたもわしが業、コレ勤忍してたもや、年もいかいではるく、の、道をいとはず苦勞して、親を尋ねる孝行娘、親はそれには引かへて、むごう情無う追返し、また其上に親の手で、殺すと云ふはマア何事ぞ、別れに云やつた順禮歌、父母の恵も深き粉川寺、どこに是が恵が深い、こんなむごい親々が廣い唐にも天竺にも、も一人と有る物かと、死骸の顔に我顔を、押當てく抱きしめ、流涕こがれ伏沈む。

野澤松之輔略歴

郷里和歌山在住の故野澤吉造に最初手ほどきを受け、昭和五年十月故六代目野澤吉兵衛の門に入る。昭和六年正月文樂座に入座し、以來吉兵衛の他界までその内弟子として薫陶を受ける。六代目吉兵衛歿後、七代目の預り門人として指導を受け、入門當初より野澤吉左を名乗り今日に到る。

その間、西亭の變名にて作詞或は作曲に従事し、昭和十五年二月當座初演の「豆まき」以來、「戰陣訓」「海國日本魂」「國威は振ふ」「水漬く屍」及び「忠靈」「土屋主税」その他所作事もの等十數篇あり。

尙、此の度吉左改め松之輔を名乗る様になつたのは、「戰陣訓」(昭和十六年三月)發表の當時、松竹白井松次郎會長より松竹の松と松次郎の松との一字を取つて、松之輔の名前を與へられたもので、今度愈々その改名披露を行ふ事になつた次第である。

人形役割割

娘	八重垣姫	桐竹紋十郎
武田	勝頼	吉田玉助
腰元	濡衣	桐竹龜松
長尾	謙信	吉田玉市
白須賀	六郎	吉田玉徳
原	小文治	桐竹紋太郎

打つて渡す事を誓ひ三年間は無爲に過ぎました。此所に信玄の息勝頼ですが、彼は奸臣板倉兵部の爲に幼時より民間に育つて花作り箕作と呼ばれ瓜二つの兵部の子が勝頼と名乗つてゐました爲に幸に偽の勝頼が切腹し、其首が渡されたのでした然して此所長尾館に仕へる腰元で此の偽の勝頼と戀仲の濡衣は、將軍義晴を狙撃した齋藤道三の娘で、父の意をうけて武田上杉を亡さんとしてゐたのですが、戀人の死に會つて驟然、武田家の爲に上杉家から法性の兜を取り返そうと、腰元となつてゐるのでした。箕作の勝頼も亦曲者詮議と幼君の守護法性の兜取戻しの爲に、花造りとなつて此の館に入りこんでゐるのでした。又上杉家の息女八重垣姫は、かねて武田勝頼とは兩家和解の爲に許婚の仲で有りましたが、偽の勝頼の切腹を、一圖に眞の勝頼が切腹したものと思ひこみ、其繪姿に向つて、絶へ果てた縁を歎き悲しむのでした。

劇は此所から始ります。



姫のかうした様を見た勝頼の箕作は、そゞろ不
 愼の念に涙するのですが、濡衣は勝頼の姿が、
 我が亡き戀人と瓜二つの容姿に、思はず胸とゞろ
 かせるのでした。そして似たとは愚か、矢張り其
 まゝと、其足下に泣き伏す聲に、姫も襖の隙から
 窺へば、正しく繪姿其まゝの人が其所に居て、濡
 衣と言葉交して居りますので、姫は改めて濡衣に
 向ひ、若し此箕作が其方の知る邊でも、又殿御で
 もないならば、戀の媒介をと頼むのでした。濡衣
 はそれが眞實の戀ならば、仲介せまいものでもな
 いかと、誓紙の代りに、法性の兜を盗み出して貰
 ひたいと云ひます。姫は兜を望むとは、扱は眞の勝
 頼様に違ひないと、箕作に絶つて嬉し涙にくれま
 すが、箕作は、いつかな本心を明かさないのでし
 た。爲に姫は、勝頼様でもない者に云ひ寄つたは
 辱しと、其場に自害して果てやうとしますので、
 此所に始めて眞實は明されたのでした。折柄謙
 信が現はれ、箕作を使ひに出すのでした。是は疾

くより、箕作を勝頼と見貫いてゐたが爲で、其後より討手の勢を向けて討んとするのでした。そして濡衣をも引立てるのでしたが、一方姫は、手に入れた法性の兜に向ひ、勝頼の身安泰を一心に祈願するのでした。と怪しや忽ち狐火燃へ立ち、白狐の姿の池水に映ると見へましたが、諏訪明神の神體に等しき兜、八百八狐つきそつて守護する奇瑞に疑ひなしと覺るや、忝なや有難やと兜を捧げ爰や彼處に燃ゆる狐火に守られて、勝頼の許に急を告げに急ぐのでした。

床 本 抄

申し勝頼様、親と親との許嫁、在りし様子を聞くよりも、嫁入する日を待兼ねて、お前の姿を繪に書かし、見れば見る程美しい、こんな殿御と添臥しの、身は姫御前の果報ぞと、月にも花にも樂しみは、繪像の傍で、十種香の、煙も香花となりたるか、回向せうとてお姿を、繪にはかゝしはせぬものを、たましひかへす反魂香、名畫の力もあるならば、可愛とたつた一ト言の、お聲が聞

きたい聞きたいと、繪像の傍に身を打ふし、流涕こがれ見え給ふ。

思ひにや、焦れてもゆる、野邊の狐火小夜ふけて、狐火や、狐火野邊の野邊の、狐火さよふけて、幾重もれくる爪音は、君をもうけの奥御殿、こなたは正體涙ながらアレ、奥の間で檢校が、諷ふ唱歌も今身の上、おいとしいは勝頼様、かゝる巧みのあるぞとも、知らずはからぬ御身の上、別れとなるもつれない父上、諫めても、歎いても、聞入れもなき胴慾人、娘不惣と思はずなら、命助けて添はせてたべと、身を打伏して歎きしが。



さんじゆうざん げん ざう むなぎのゆ らい
卅三間堂棟由來

平太郎住家の段
 木遣り音頭の段

平太郎住家の段

切竹本 大隅太夫
 鶴澤清二郎

木遣り音頭

竹本 源太夫
 竹本 文太夫
 竹本 雛太夫
 豊竹 文字太夫
 豊竹 つばめ太夫
 竹本 播路太夫
 竹本 越名太夫
 豊竹 呂賀太夫

京都卅三間堂棟由來を題材とした淨瑠璃の古いものには、宇治加賀掾の物語「熊野權現」(延寶九年刊行〔三四一〕大竹集に外題見ゆ)、或はその改作、山本河内掾作「都三十三間堂棟由來」、或は別に「熊野權現開帳並平太郎奇瑞物語」などがある。後、此等の古淨瑠璃を藍本として、寶曆十年(二四二〇)十二月、豊竹座で興行の若竹笛舁、中村阿契合作の「三十三間堂平太郎縁起祇園女御九重錦」全五段が生れ、其三段目が今日行はれる卅三間堂の直接原據となつたもので、文政八年(二四八五)七月から御靈境内で「卅三間堂棟由來」の外題で三段目だけが上場され、以後、同じ外題の下にこの平太郎住家のみが度々上演されて今日に及んで居る。

梗概

北面の武士横會根光當の一子平太郎は、父光當

鶴	鶴	鶴	竹	鶴	鶴	豊	鶴	豊	野	豊	鶴	豊	竹	豊	豊	豊	竹
澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	澤	本	竹	竹	竹	本
叶	友	吉	清	團	清	廣	友	團	八	猿	清	新	三	富	千	司	隅
太	三	衛		一			十	伊	造	二	左	瀧	太	太	太	太	若
郎	平	郎	廣	作	友	二	郎	三	造	郎	八	門	夫	夫	夫	夫	夫

が腹黒き同役に討たれ、その仇を報ぜんものと、五年以前からこの紀の國に来て住んでゐた。或る時、熊野山中で、鷹狩に來た季仲の一行が、鷹の足尾が柳の大木にかゝつたのでこの木を伐らうとした。その時來合した平太郎は、弓を射て鷹の足尾を斷ち柳の難を救ふた。この柳の精はその恩に感じて女人となり、平太郎の妻となつて一子綠丸を生み、幸福な月日を送つてゐた。

その頃、京都で高貴の方が御惱みになつてゐたが、神の御告げで、その御前身たる高僧の髑髏が柳の元に埋まつてゐるのを取り出し、その柳の大木を棟木として卅三間堂建立せば忽ち平癒するとあつたので、愈々この柳を伐り取ることになつた。是に於て、お柳は平太郎や綠丸と別れねばならなくなつた。

お柳は平太郎や綠丸が寢に就いたのを幸に、其身のゆかりをかこち離別を告げて去らうとした。

人形役割

女房	お柳	桐竹紋十郎
横會根	平太郎	吉田玉造
平太郎	の母	吉田小兵吉
進野	藏人	桐竹政龜
悴	綠丸	桐竹紋之助
木遣り	人足	大ぜい

平太郎は夢幻にこれを聞き、起き上つてこれを引き留めた。老母も綠丸も共に起き出て来てお柳にすがつた。お柳も別れが悲しかつた。折から風に連れ、柳を伐り倒す音が聞えて来る。今はとてお柳は髑髏を夫に渡し、「これを手柄に再び出世をなし給へ」と呼ばゝりつゝ姿を消してしまふ。

平太郎は綠丸をつれて今一度、柳の木に對面して最後の別れに急いで行く――。

柳の大木は伐り倒され、御用に立つべく京都へ向つて、木遣り音頭も勇ましく引かれて行く――が、不思議や、途中でバツタリ動かなくなつた。曳けども押せども微動もしない。其の時進み出た平太郎、綠丸。役人進野藏人の許しを得て、綠丸が綱を曳き、平太郎が音頭を取ると、流石の大木も易々と動き出した。二人の目には、妻を懐つかしき、母を戀ふの涙が光つてゐる――。



床 本 抄

やう／＼に氣をしづめ、ヲ、それよ互に顔を合せては、身の上語るも面はゆし、寢入給ふを幸ひに、今自が云ひ残す、必ず夢と思さずと、明ら様に聞いてたべ。ノウ、我こそ誠は柳の精、雨露の恵に生育ち、かやうに夫婦と成る事も一方ならぬ因縁ぞや、先の生にて誓たる、契りを結ばん其の爲に假に女の姿と變じ、柳が本に待受て夫婦となりしも、五とせの、春や昔の春の頃、季仲が鷹狩に、鷹の足尾のかゝりし時、數多の武士に切崩され、既に枯なん此柳、其時にお前が一矢の手柄鷹を助けて葉柳の、枝に障りも、あれ／＼／＼又もや爰にちりくる葉は、我を迎ひに来るかと、思へばやる方詮方も、なく／＼見やる足元へ、ちりくる柳の葉隠れや、亂るゝ心押しづめ。其時の情の恩、送る月日も重なりて、柳の花のコレ縁丸、最早今年で五歳の春秋の重なれば、乳がなくとも育つべし、成人の後々は、父の弓矢を請傳へ、潔い名を上てたもや、ヤ、母は今を限りて、元の柳に返るぞや、必ず草木成佛と、回向を頼む夫よ子よ、離れがたなや悲しやと、いふ聲さへも忍び泣き、立つて見、居て見聲上げて、わつと計りに泣叫ぶ。

和歌の浦には名所が御座る、一に権現二に玉津島、三に下り松、四に鹽釜よ、ヨイ／＼ヨイトナ

むざんなるかな幼き者は、母の柳を都へ送る、元は熊野の柳の露に、育て上げたる其縁子が、ヨイ／＼ヨイトナ



文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはすうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くぐつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があら

はれて音樂上の大成を試み、作者近松門左衛門を得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と、人形の動作とがピッタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノポーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がゝりて、寫實的に遣ふや

うになつたのが享保十九年の「蘆屋道満大内鑑」(葛の葉の狂言)からといふことになつてゐる。

今日から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形(略してツメ)と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむづかしい。足遣

ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲繰り式のはもつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞

臺に相當して、屋内に用ひられる。最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃は、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はず、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつたそれが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、

出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で、複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜萃)

京阪神松竹系各座 十月興行のお知らせ

<p>阪大 座天弁</p>	<p>阪大 座角</p>	<p>阪大 座中</p>	<p>阪大 座伎舞歌</p>	<p>京阪神松竹系各座 十月興行のお知らせ</p>
<p>不二洋子一座 近江二郎加盟 平日・正午より二回開演 日曜・祭日・十時開演</p>	<p>前進座 日曜祭日 十一時半 夜五時 二回開演 毎夕五時開演</p>	<p>松竹家庭劇 毎日正午・五時二回開演 お目見得狂言四日まで 八日初日二の替り</p>	<p>林又一郎襲名興行 正午と五時開演 晝夜二部興行</p>	
<p>(脚劇料) 平土間椅子席 六十九錢 一等席 一圓三十錢 (税別)</p>	<p>(脚劇料) 五等席 一、五〇〇 四等席 一、一〇〇 三等席 七、五〇〇 二等席 五、〇〇〇 一等席 三、〇〇〇 特等席 四、〇〇〇 (税別)</p>	<p>(脚劇料) 四等席 一、七〇〇 二等席 一、一〇〇 一等席 七、九〇〇 特等席 二、二〇〇 (税別)</p>	<p>(一部観劇料) 一等席 一、八〇〇 二等席 一、四〇〇 三等席 一、〇〇〇 一等席 三、五〇〇 (税別)</p>	
<p>阪大 劇大</p>	<p>都京 座南</p>	<p>戸神 場劇竹松</p>	<p>阪大 場劇べしあ</p>	<p>阪大 座花浪</p>
<p>大阪名物年中行事第八回 秋のおどり二十景 松竹少女歌劇總出演 第一週「新雪」 第二週「海の家族」 第三週「翼の凱歌」 第四週「續南の風」 同時封切映畫は</p>	<p>劇團新生家族 土曜・日曜・祭日 十二時・五時・二回開演 毎日五時開演 (脚劇料) 四等席 七、七〇 三等席 一、一〇〇 二等席 一、七九〇 一等席 二、五〇〇 (税別)</p>	<p>關西精銳歌舞伎 正午と五時・二回開演</p>	<p>大阪中て一番安い 笑ひの劇場 毎日正午開演 日曜・祭日・十時開演 (観劇料) 階下席 四二 階上席 七七 (税別)</p>	<p>新興演藝特輯番組 毎日正午開演 日曜・祭日・十時開演 (観劇料) 階下席 八五 階上席 一、五〇 (税別)</p>

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一

體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場であるます。

文樂座人形淨瑠璃は 嘗に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませう、皆様の御期待に

背かね様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りまが尙御す氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に

設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雜致しますからお服物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階、二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ

此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と

二階に御座ります。

場内にて 寫眞撮影は絕對にお断り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附け

下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤

めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス準備として

案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問、各種團體御觀賞會、又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に願ひ、よろづ御案内申上上げる事に致しました。御一舉次第登り、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十七年九月廿八日印刷 大坂市西區久左衛門町八番地
昭和十七年十月一日發行 發行所 松竹株式會社大阪支店

大坂市西區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
發行所 鳥江鏡也

大坂市西區土佐堀通一丁目十二
印刷所 永井日英堂印刷所 一部
金二十錢

